

く皆毛と見へ、行事馬のかけることく、兼而啼聲はなし、かける節うなる聲あり、喰もの何にかぎらず人よりあたへすれば、丸石木の實にてもたべ申候鳥也、尤其儘せうにて糞に落る、平生飯からいも類餌飼いたし、日ニハ貳升當ニ飼方也、暖國鳥にて寒をきらひ、峙藁にてかこひ、臥所も藁を澤山に入、其内に留置なり、大坂にては峙の節内に土鳩を數多かこへに入、兩方へつみ置、其間へ寢す也、寒まのぎの工夫もつとも成べし、此玉子とて東都へ廻り壹尺餘り、玉子紅毛人持渡を長崎にて見たる事有り、火を喰鳥にて食火鳥ともいふよし、頭と足は鳥にて胴は猪のまゝと見ゆる、本國にて廣原に住居、草苺の者間々追出シ、逃去事矢のごとし、外の紅毛人より嘶聞し也、勿論足のひかへなし、

〔扶桑略記四孝德〕白雉元年二月庚戌、鶯羅國獻大鳥、其形如駝、能食銅鐵、

〔桃源遺事五〕一南蠻人或年鳥を獻じ候、其鳥火を喰申候、人その名をまらず、西山公○德川夫は駝鳥といふもの也と仰られ候、

〔内安錄〕一間宮筑前守長崎勤中取入候由、駝鳥の卵所持致し居、珍敷もの故、御小納戸諸左衛門、大納言様へ入御覽度と持出、此頃何事も大御所様へ御内慮伺候こと故、右之様御内慮伺候處、駝鳥は孝恭院様薨御之年○德川安永八年○天明年○德川家基薨に御城へ出、又浚明院様薨御之年○德川天明六年○德川家治薨も御城へ出、不吉のもの故、差出申まじくとの御意有之、

鳳五郎鳥

〔本朝食鑑六山禽〕鳳五郎鳥

往年阿蘭陀國貢之狀類、天鷲大鳥、而高六七尺許、灰白色帶黃色、頰黑似鷄雉、嘴黑如大斧、脛掌類雞、而肥大如馬蹄、能食鐵石、竹木、惟賞恠形耳、其國人謂代馬作米薪之用、未知之、

〔本朝食鑑六華和異同〕鳳五郎

此鳥番語曰保宇吳呂宇、故長崎人稱鳳五郎、予○平野昔問長崎人、彼人曰、鳳者鳥之大也、五郎者多